

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。)

二一世紀の世界は、カントやヘーゲルが生きた時代の世界と大きく異なった構造をしている。むかしもいまもともに国民国家を基礎とし、国家が集まって国際社会をつくっているが、その集まりかたやつくりかたはまったく異なっている。国家について考えることが政治について考えることに等しいとは、もはや言えない。現代世界では、国家を介さない政治、もはや国家には管理できない政治の領域が巨視的にも微視的にも広がっている。だからぼくたちは新しい政治思想を必要としている。

まずは国家のイメージ<sup>①</sup>について考えてみよう。そもそも国家とは何か。ヘーゲルは国家を市民社会の a だと捉えた。

ある土地にたくさんの方が住み、たがいの生産物を交換し、ともに生きる。それが市民社会だが、それだけでは国家は生まれない。なぜならば、彼らは、自分たちがなにをしているかを自覚せず、ただ目のまえの必要性に駆動されて交換しているだけだからである。彼らがその現実について反省し、自分たちがなぜこの他者たちと関わりをもっているのか、その理由を探りアイデンティティの意識が加わることでじめて国家は生まれる。それがヘーゲルの哲学の要である。

国家とは市民社会の a である。この単純な定義はいまでも大きな示<sup>②</sup>サを与えてくれるが、もうひとつ同じように注目すべき定義がある。

カントは『永遠平和のために』で、「国家をもった民族」はひとつの b をもつものと見なしてさしつかえないと記している。

その想定は、たんなる思いつきにとどまらず、カントの議論の要になっていると考えられる。というのも、彼は、複数の国家が国際社会を構成することと複数の人間が市民社会を構成することを類比的に並べ、そこから国際体制論を始めているのだが、そのような類比はそもそも国家を人間と等置しないと成立しないからである。それゆえ、同じ等置は『永遠平和のために』のほかの箇所でも顔を出している。たとえばカントは、永遠平和を目指す国家連合の設立のためには、構成国それぞれがまず共和国にならないと主張する。この規定の意味についてはさまざまな研究があるが、とりあえずここで重要なのは、国家が共和国にならないと国家連合に入れてもらえないというその話は、構造的には、人間が大人にならないと市民社会に入れてもらえないという、ごくありふれた「おまえも大人になれ」的な話と完全に同じかたちをしているということである。カントは、人間が成熟すれば市民社会をつくるように、国家もまた成熟すれば永遠平和をつくると考えた哲学者だった。

カントは、国家は b だと考えた。ヘーゲルは、国家は市民社会の a だと考えた。このふたつの定義を組み合わせると、つぎのイメージが導かれる。人間に身体と精神があるように、<sup>注</sup>国民国家(ネーション)には市民社会と国家があるというイメージである。ネーションというひとつの「実体」の身体的な側面と精神的な側面、あるいは経済的な側面と政治的な側面、それぞれが市民社会と国家に相当する。

このイメージは、ナショナリズムの時代の世界観をきれいに表現している。ナショナリズムがいつ始まったのか、その規定は研究者により異なるが、大澤真幸『ナショナリズムの由来』によれば、ナショナリズムは、起源こそ絶対王政期に遡るが、本格的に始動したのは、一八世紀末から一九世紀にかけて、まさにカントとヘーゲルが活躍した時代のことである。その時代には、ネーションの単位で政治制度が整備されるとともに、それまでなれば自然に生まれていた徴税や経済の範囲が、「国民経済」という言葉であらたに捉え返されるようになった。言語や生活様式を共有する人々が住み、同じ法や警察に支配され、統一の意志のもとで交通網が整備された一定の地理的領域が、政治の単位だけではなく、経済の独立した単位としても認識されるようになったのである。そしてそれは、のちに文化の単位とも見なされるようになった。

カントとヘーゲルはナショナリズムの出発点に立ち会った。それゆえ彼らの国家観は、来たるべきナショナリズムの時代における世界観のひな形となった。ここでは、個人でも家族でも部族でもなく、あらたに現れた「ネーション」なる単位こそが、政治と経済と文化の共通の基体と見なされたのだ。

しかしながら、ぼくたちはもはや、以上のような素朴なナショナリズムの時代には生きていない。

ぼくたちはいま、食べるもの、着るもの、見るもの、聴くもの、ほぼすべての商品が、国境を越えて、つまりネーシ

ヨンなど存在しないかのように流通している時代に生きていく。ほくたちは、東京でもニューヨークでもパリでも北京でもドバイでも、どこでも変わらずマクドナルドでハンバーガーを食べ、GAPで服を買い、ショッピングモールでハリウッド映画を観ることが出来る。あるていど豊かで安全な都市を歩いているかぎり、人々の服装や街頭の広告はほとんど変わらず、ネーションのちがいを意識する必要はほとんどない。言い換えれば、人類社会は、消費という点ではほとんどひとつの社会になりつつある。冷戦後のこの四半世紀でその変化は劇的に進んだ。これからもその変化はますます進むことだろう。ネーションはいまや経済と文化の基体になっていないのだ。

にもかかわらず、ここで問題なのは、そんな現代でも、いまだ国境は存在し、ネーションもナショナリズムも存在していることである。それどころか、それらの存在感は逆に増し始めている。去る二〇一六年は、世界各国でグローバリズムへの反発が顕わになった年だった。イギリスはEUからの離脱を決め、アメリカはトランプを大統領に選出した。ヨーロッパの世論は難民の排除に大きく傾いている。日本でも近年は公然と排外主義が語られている。

かつて、ナショナリズムの時代は終わり、これからはグローバリズムの時代が来ると楽観的に語られたことがあった。いまでも情報社会論ではそのような楽観主義が見られる。しかしその「移行」は、かりに未来では実現するとしても、そう簡単に進むものではなさそうである。現実にはこの四半世紀、グローバリズムが高まるとともに、ナショナリズムもまたその反動として力を強めている。そしていまや両者の衝突こそが政治問題となつていく。つまりは、世界はいま、一方でますますつながり境界を消しつつあるのに、他方ではますます離れ境界を再構築しようとしているように見える。ほくたちが生きているのは、カントが夢見た国家連合の時代（ナショナリズムの時代）でもなければ、SF作家やIT起業家が夢見る世界国家の時代（グローバリズムの時代）でもなく、そのふたつの理想の分裂で特徴づけられる時代である。

この分裂はなぜ生じたのだろうか。

ナショナリズムの時代の世界像の意味を、あらためて考えてみよう。そこでは国家と市民社会は、ひとつの実体（ネーション）の精神と身体になぞらえられていた。

ここで精神と身体を対比を、フロイト的な意味での「意識」と「無意識」の対比に、あるいはさらに低俗に、「上半身」と「下半身」の対比に重ねてみる。上半身は思考の場所、下半身は欲望の場所である。だとすれば、国民にとつて、国家は政治は思考の場所、市民社会は経済は欲望の場所だと言うことができる。実際、国民は政治の場では政策について理性をもって熟議するし、経済の場では必要と欲望にしたがい自由にモノを購買するものだと見なされている。

A

国民国家（ネーション）は、国家と市民社会、政治と経済、上半身と下半身、意識と無意識のふたつの半身からなっている。カントとヘーゲルは、この前提のうえで、国家が市民社会のうえに立ち、政治の意識が経済の無意識を抑えこんで国際秩序を形成するのが、人倫のあるべきすがただと考えた。

ナショナリズムの時代においては、国家と市民社会、政治と経済、公と私のみならず、ひとつの実体としてネーションが構成されていた。だからこそネーションがすべての秩序の基礎となりえた。

けれども、二一世紀の世界ではまさにその前提こそが壊れているのである。そしてここで重要なのは、かつてネーションそのものが壊れたのではなく、ただネーションの統合性が壊れただけだと理解することである。

いまもネーションは生き残っている。政治はいまだにネーションを単位に動いている。政治家は国民から信任を集め、国民のために働いている。そこには厳然とネーションの感覚がある。けれども経済はネーションを単位としていない。商人は世界中の消費者に商品を売り、世界中の消費者から貨幣を集めている。大企業だけでなく、驚くほど小さな企業や個人でさえ、いまや国境を越えて商売をしている。そこにネーションの感覚はない。政治の議論はネーション単位で分かれているが、市民の欲望は国境を越えてつながりあっている。それが二一世紀の現実である。

言い換えれば、ほくたちが生きるこの二一世紀の世界においては、国家と市民社会、政治と経済、思考とナショナリズムとグローバリズムという異質なふたつの原理に導かれ、統合されることなく、それぞれ異なる秩序をつくりあげてしまっているのだ。グローバリズムはナショナリズムを破壊したのではない。それを乗り越えたのでもない。ましてやその内部でナショナリズムを生みだしたのでもない。それは、単純に、既存のナショナリズムの体制を温存したまま、それにオオいかぶせるように、まったく異質な別の秩序を張りめぐらせてしまったのである。

C

(注) 国民国家(ネーション)……一つの国に所属しているという意識を持つ人々(国民)によって構成され、法や行政などの諸制度(国家)によって統合された、政治的・経済的・文化的な共同体をいう。

問一 傍線部⑦・⑧のカタカナを漢字で表現したとき、同じ漢字をカタカナの部分に用いるものを、それぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

⑦ 示サ

イ □をサし挟む    ロ ソソノカす    ハ トきふせる    ニ サし花    ホ サトす

⑧ オオいかぶせる

イ イ碁    ロ ヒ露    ハ フウ鎖    ニ フク面    ホ ホウ括

問二 空欄 a b c に入る言葉として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

空欄 a

イ 他者認識    ロ 虚構    ハ 理想形    ニ 現実    ホ 自己意識

空欄 b

イ 生命    ロ 秩序    ハ 自覚    ニ 人格    ホ 実体

空欄 c

イ 欲望    ロ 感覚    ハ イメージ    ニ 知覚    ホ 希望

問三 傍線部「おまえも大人になれ」的な話と完全に同じかたちをしている」とあるが、筆者がそう考える理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 永遠平和を目指す国家連合の構成国は、政治的・経済的・文化的に統一された一つの単位であることが求められるから。

ロ 永遠平和を目指す国家連合の構成国は、成熟した共和国であることが求められるから。

ハ 永遠平和を目指す国家連合の構成国は、自立した常識ある大人の集合体であることが求められるから。

ニ 永遠平和を目指す国家連合の構成国は、独立したネーションであることが求められるから。

ホ 永遠平和を目指す国家連合の構成国は、市民社会が国家を主導する人倫のあるべき姿を求められるから。

問四 傍線部2「ネーションというひとつの「実体」とあるが、その「ネーション」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「ネーション」は、国家を構成する「国民」を含意している。だから人の越境や企業の多国籍化が進むグローバル化の時代において、「ネーション」という概念はすでに「実体」を持たない。
- ロ 「ネーション」は、法や行政などの諸制度によって国民を統合する「国家」を含意している。だから、法的に国家を形成していない社会はナショナリズムの基体となり得ず、「ネーション」としての「実体」を持たない。
- ハ 「ネーション」は、「国民国家」の意味で使われることがある。これはカントやヘーゲルの時代以降の近代国家の特徴であり、それ以前の国家は「ネーション」としての「実体」を持たない。
- ニ 「ネーション」は、市民社会が形成されていることが前提になっている。だから、共和制以外の、独裁制や王政の国家は「ネーション」としての「実体」を持たない。
- ホ 「ネーション」は、国際社会を構成する単位でもある。だから、永遠平和を目指す国家連合への加入が認められない国家は「ネーション」としての「実体」を持たない。

問五 傍線部3「素朴なナショナリズムの時代」とあるが、その説明として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ カントが、人間が成熟すれば市民社会をつくるように、国家もまた成熟すれば永遠平和をつくる、と考えた時代
- ロ 言語や生活様式を共有する人々が住み、同じ法や警察に支配され、交通網が整備された一定の地理的領域が、政治・経済・文化の単位となる時代
- ハ 個人でも家族でも部族でもなく、「ネーション」なる単位こそが、政治と経済と文化の共通の基体と見なされる時代
- ニ 国家と市民社会、政治と経済、公と私のふたつの半身が合わさり、一つの実体＝ネーションが構成される時代
- ホ 政治がネーションを単位に動き、政治家が国民から信任を集めて、国民のために働く時代

問六 傍線部4「ふたつの理想の分裂」とあるが、その例として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ わたしたちは国家に属しているが、国家を介さない政治、もはや国家には管理できない政治の領域が巨視的にも微視的にも広がっている。
- ロ あるていど豊かで安全な都市を歩いているかぎり、人々の服装や街頭の広告はほとんど変わらず、ネーションのちがいを意識する必要はほとんどないが、いまだ国境は存在している。
- ハ ナショナリズムの時代は終わり、これからはグローバルイズムの時代が来ると楽観的に語られたが、その「移行」は簡単には進んでいない。
- ニ 世界はいま、一方でますますつながり境界を消しつつあるのに、他方ではますます離れ境界を再構築しようとしている。
- ホ 政治の議論はネーション単位で分かれているが、市民の欲望は国境を越えてつながりあっている。

問七 空欄 A には次の一連の文が入る。正しく並べ替えたとき、二番目に来る文を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 少なくともそのつもりになっている。
- ロ 排外主義やヘイトスピーチを想像してみてほしい。
- ハ 国民はふだん、政治の合理的な思考に基づき行動している。
- ニ けれども、現実にはつねに、市民社会に渦巻く非合理的な欲望に悩まされている。
- ホ そして他国に見せるのは、カントが言うように国家という顔Ⅱ人格だけである。
- ヘ したがって、その欲望の管理は、健全な国際秩序を設立するうえで致命的に重要になる。

問八 傍線部 5 「ネーションの統合性が壊れただけだ」とあるが、筆者がそう考える理由として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人類社会は、消費という点ではほとんどひとつの社会になりつつあるが、まだ国境は存在し、ネーションもナシヨナリズムも存在しているから。
- ロ この四半世紀、グローバリズムが高まるとともに、ナシヨナリズムもまたその反動として力を強め、両者の衝突が政治問題となっているから。
- ハ ぼくたちが生きているのは、カントが夢見た国家連合の時代（ナシヨナリズムの時代）ではないが、SF作家やIT起業家が夢見る世界国家の時代（グローバリズムの時代）でもないから。
- ニ ナシヨナリズムの時代には、国民と市民社会が、一つの実体（ネーション）の精神と身体になぞらえられているから。
- ホ 政治はネーションを単位に動いていて、そこには厳然とネーションの感覚があるが、いまや小さな企業や個人でさえ国境を越えて商売をしていて、そこにはネーションの感覚がないから。

問九 傍線部 6 「まったく異質な別の秩序を張りめぐらせてしまった」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ いまや国家を介さず、国家には管理できない政治の領域が巨視的にも微視的にも広がっており、新しい政治思想が生まれつつある。
- ロ 世界中どこでも変わらぬショッピングモールでハリウッド映画が観られることが肯定される一方で、世論は難民の排除に大きく傾いている。
- ハ 人類社会は、消費という点ではほとんどひとつの社会になりつつあり、冷戦後のこの四半世紀でその変化は劇的に進んでいる。
- ニ グローバリズムはナシヨナリズムを破壊したのでも、乗り越えたのでもなく、ナシヨナリズムの再生産を黙認し、その一部としている。
- ホ 二一世紀の世界では、ネーションがすべての秩序の基礎となるという前提が壊れ、ナシヨナリズムとグローバリズムが分裂するようになっていく。

問十 本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ある土地に住み、生産物を交換し、ともに生きる個人が自覚し、アイデンティティの意識が加わることで、初めて国家が生まれるとヘーゲルは考えた。国家の形成が人間の成熟と関わっているとすると、ヘーゲルとカントは同質である。

ロ 国際社会は複数の国家によって構成されている。成熟した共和制の国家による国家連合の設立によって、永遠平和を目指すことをカントは考えた。その理念は現在の国際連合にも引き継がれている。

ハ 一八世紀末から一九世紀にかけて、徴税や経済の範囲が「国民経済」という言葉であらたに捉え返されるようになった時代に、初めてナショナリズムは生まれた。したがってネーションの成立はナショナリズムに先行している。

ニ いまでは、ほぼすべての商品が、国境を越えて、つまりネーションなど存在しないかのように流通している。言い換えれば、ネーションが国境を管理する政治的な基体となり得なくなっている。

ホ 情報社会論で語られるような、ナショナリズムの時代からグローバル化の時代への「移行」は簡単に進むものではなさそうである。それは、政治的な基体と経済的・文化的な基体が分裂してしまったことが一因である。

ヘ 二二世紀の世界において、国家と市民社会は、ナショナリズムとグローバル化という異質なふたつの原理に導かれ、それぞれ異なった秩序をつくりあげている。このふたつの原理を統合する新たな政治思想がいま求められている。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。)

『今昔物語集』(以下『今昔』と記す)巻第一から巻第三までは、釈迦の伝記とかれの説法で満たされている。すべてで百十四話。今日までのすべての仏教史学者は、聖徳太子の『三経義疏』、空海の『三教指帰』、源信の『往生要集』等にふれても、この日本最初の、しかも片仮名で書かれた仏陀伝と、それをささえる情熱を指摘し評価しなかった。説教の座で壇上の僧が口で語った断片の堆積だけが、多数の人々の信仰のよりどころであり、僧侶たちは漢訳仏典を抱きしめても、それを自分たちの民族の土に移し植えようとはしなかった永い永い年月に、仏教史学者は疑問をもたないのだろうか。『今昔』巻第一の冒頭には、次のような話が並んでいる。

「釈迦如来人界に宿り給ふ語第一」「釈迦如来人界に生まれ給ふ語第二」「悉達太子城にありて楽しみを受くる語第三」「悉達太子城を出でて山に入る語第四」「悉達太子山において苦行の語第五」「天魔、菩薩の成道を妨げむと擬る語第六」「菩薩樹下において成道の語第七」「釈迦五人の比丘のために説法の語第八」「舍利弗外道と術を競ふ語第九」「提婆達多仏と諍ふ語第十」。これらは、大部分が『過去現在因果経』に拠ったもので、『増一阿含経』や『大智度論』を典拠としたものもあることがわかった(片寄正義『今昔物語集の研究』上)。『因果経』からとった話にも、それだけでなく、一部に『仏本行集経』からの話を加えたものがある。『今昔』の編者が、かれの仏陀伝の最初の部分を、どんな素材を用いて組み立てていったかが、このことからうかがえるだろう。

ここでは、それにづく第十一話をみてみよう。

今は昔、仏、婆羅門城に入りて、乞食し給はむとす。其の時に、かの城の外道ども、皆心を一にして云はく、この比丘曇比丘と云ふ者の、人の家毎に行て物を乞ひ食ふ事有り、憎く無愛なり。さるは、もと止事無かるべかりし者なり。浄飯王の御子にて王位を継ぐべかりしに、そぞろに物に狂ひて山に入て仏に成りたりとぞ云ふなる。人の心を欺けばこれに謀らるる者多かり。これに努々供養すまじと云ひ廻して、若この起請を壊りて供養する者有らば、国の境を追ふべしと告げ廻して後、仏御ませども、或家には門を差して入れ奉らず、或家には答もせで久しく立て奉りたり。或家には御ますまじき由を云ひて追ひ奉る。

かくのごとくして、日高く成るまで供養を受け給はず。鉢を空しくして胸に充給ひて、疲れ極じ給へる気色にて返り給ふを、或家より女、米を洗ひたる汁の日来に成りてくちたるを、棄むとて外に出たるに、仏の供養も受け給はで返り給ふを見奉りて、悲しびの心を発して、何を供養し奉るべき物なし。甲と思ふに、身貧しくして更に供養し奉るべき物なし。いかにせむと思ひて、目に涙を浮かべて立てる気色を仏見給ひて、汝は何事を歎き思ふぞと問ひ給へば、女答へて云はく、仏の日高く成るまで供養を受け給はで、返り給ふを見奉りて、我供養し奉らむと思ふに、家貧しくして露供養し奉るべき物なし。これに依りて歎き思ふなりと云ひて、涙を落して哭く時に、仏の宣はく、其の汝が持ちたる桶には何の入りたるぞと。女答へて云はく、これは米の洗ひたる汁のくちたるを棄てに行くなりと。仏の宣はく、只それを供養すべし。米の気なれば吉き物なりと。女、これはいと異様なれども仰せに随ふなりとて、御鉢に入れつ。

仏これを受け給ひて、鉢を捧げて、呪願して宣はく、汝この功德に依りて、天上に生まれば、初利天の王と成り、人界に生まれば、国王と成るべし。これ限りなき功德なりと。

仏の教えを信じるものは、仏の教えの内容を知るだけでなく、それがどのような人間苦を通して獲得されたかを知らねばならない。『今昔』の編者は、みずから各種の仏典にわけ入って、教祖の人間としての求道の姿を追求している。そして、その中で、このように、まだようやく伝道の仕事を始めたばかりのある日の仏陀の姿を描く。この廃太子は、当時狗曇比丘と呼ばれていた。比丘、すなわち一求道者としか認められていない。しかし、かれの説く所には、すでに、腐敗した既成宗教にあぐらをかいた婆羅門たちを脅かすものがふくまれていたのである。後の仏教徒から見るとの異教徒——外道どもは、釈迦を乙戦術で苦しめようと謀る。「これにゆめゆめ供養すまじ」と約束し合った、固い反対同盟も知らずに、釈迦は家々の門に立つ。何一つ供養の物を受けることはできない。その時の釈迦の姿を、『今昔』は「かくのごとくして、日高く成るまで供養を受け給はず。鉢を空しくして胸に充給ひて、疲れ極じ給へる気色にて返り給ふ」と、乞食王子の具体的な形象でいきいきと描いている。この話は、かつて片寄氏が考証したように、龍樹の『大智度論』巻八によったもので、次のようになっていた。





問十二 傍線部B「もと止事無かるべかりし者なり」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 根本的には優れた人物であったのかもしれない
- ロ 釈迦の先祖は外道の出身者であったはずである
- ハ もともと定住しない流浪の人なのかもしれない
- ニ 物乞いの元祖は実は高貴な階級出身者であった
- ホ 本来は高貴な地位に就くはずであった者である

問十三 空欄 甲 に入る、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ らざる
- ロ らまし
- ハ りけむ
- ニ りたし
- ホ るべく

問十四 傍線部C「目に涙を浮かべて立てる」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 女は供養する米のとき汁が腐っていることに気付き、残念なことだと思っていた。
- ロ 女は初めて釈迦に会うことができたため、自然に涙がこぼれるほど感動していた。
- ハ 女は王や主人に知られないように、わざと太陽が沈んで暗くなるまで待っていた。
- ニ 女は供養すべき物を持っていないことを悲しみ、たたずむことしかできなかった。
- ホ 女は仏の鉢に米のとき汁をそそぐことができたため、うれしさの余り涙を流した。

問十五 『今昔物語集』は、日本最大の説話集といわれるが、同じジャンルの作品名を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 『古事記』
- ロ 『源氏物語』
- ハ 『宇治拾遺物語』
- ニ 『平家物語』
- ホ 『伊曾保物語』

問十六 傍線部D「人間苦」とは、ここでは具体的にどのような苦をあらわしているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 僧侶が漢訳仏典を独占していたときに、はじめて仏陀伝を片仮名で書き記した際に費やした情熱と苦しみ。
- ロ 悉達太子が城にいてさまざまな楽しみを受けたが、悟りを得るために山に入って直面した苦しい修行の道。
- ハ 成道間近にもかかわらず天魔によって妨害を受けたため、菩薩がなかなか悟りを得ることが出来ない苦渋。
- ニ 悟りを得て仏となった後も、布教の初期段階において外道たちから妨害されるなど仏が直面した苦難の道。
- ホ 死後に天上界に生まれ、次に国王と生まれ変わったとしても、いつまでも輪廻転生から逃れられない苦痛。

問十七 空欄 乙 に入る、最も適切な語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 飢餓
- ロ 乞食
- ハ 起請
- ニ 供養
- ホ 異様

問十八 傍線部 E 「若有与仏食聴仏語者」の訓読として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 若し仏と与に食し仏の語を聴く者有らば
- ロ 若し仏に食を与へ仏の語を聴く者有らば
- ハ 仏と与に有りて食し仏語を聴く者の若きは
- ニ 仏食を与へ仏語を聴く者有るが若きは
- ホ 若き仏と与に食し仏に聴きて語る者有らば

問十九 空欄 丙

に入る、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 婆羅門城王      ロ 今来ニ到此
- ハ 輪ニ 五百金銭
- ニ 閉レ 門不レ 応      ホ 仏空鉢而出

問二十 傍線部 F 「釈迦が普通の求道者でない」と、女はどうしてわかったのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 弟子と城中を乞食したが門を閉じられてしまったから。
- ロ 仏の鉢に何も入っていないのに元気で歩んでいるから。
- ハ 仏の相好が金色で他の人と異なる相を備えていたから。
- ニ 仏は神人であるため天人の厨房の物しか食べないから。
- ホ 自ら近づいてみると慈悲とあわれみの心を表したから。

問二十一 本文の内容と合致しないものを、次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 『今昔物語集』巻第一の冒頭に、釈迦が人間世界に宿り、生まれ、楽しみを受け、出家し、苦行し、天魔に妨げられ、成道し、説法し、外道と術比べを競うことなどが記されており、これらの多くは仏教経典や論著に依拠している。
- ロ 仏は、王位を継ぐべき優秀な人物であったが、外道にだまされて山に入り修行した結果、人の心を欺く能力を身につけたため、婆羅門城では仏の教えを禁じて、これを破った者は追放すると定めていた。
- ハ 仏は、貧しい女から腐ったとき汁の供養を受けた時、あなたはこの功德によって天上に生まれれば切利天の王となることができるし、人界に生まれれば国王になることができると予言した。
- ニ 婆羅門城の老使人は、仏の相好が金色に光り輝いているため、本来はそんな必要がないにもかかわらず、わざと身をやつして乞食することによって、一切の哀れみを拒否していることを見抜いた。

ホ 『今昔物語集』の仏陀伝は、キリスト教でいえば『福音書』に相当するほど重要な位置を占めており、ここで日本で初めて釈迦の伝記が片仮名で著されたことに対し、高く評価しなければならぬ。

〔以下 余白〕